

令和7年度 第1回 北海道立函館美術館協議会会議録

- 1 日 時 令和7年8月20日（水） 10:00～11:15
- 2 会 場 北海道立函館美術館 講堂
- 3 出席委員 佐藤会長、元木副会長、高橋委員、梨木委員、吉田委員、澤田委員、高村委員
（欠席委員：石岡委員、土生委員、桜花委員、鳴海委員、熊木委員）
- 4 傍 聴 者 なし
- 5 議 事

(1) 報告事項

ア 令和6年度事業実施状況について

事 務 局：「令和6年度（2024年度）事業の実施状況について」に基づき説明。
委員からの意見等なし

イ 令和6年度道立美術館評価について

事 務 局：「令和6年度（2024年度）道立美術館評価について」に基づき説明。
委員からの意見等なし

(2) 協議事項

令和7年度事業の運営計画について

事 務 局：「令和7年度（2025年度）事業の運営計画について」に基づき説明。

委 員： 山下清展について、知人など来館者から多くの感想を伺った。

特に音声ガイドの評判が非常に良いとの声が多かった。

また、新聞に掲載された担当学芸員の解説を事前に読んでから来館した方は、作品の持つ重厚さや、展示室で初めて見る精緻な描写に深く感動されたそうである。

展示室内にキャプションが掲示されているものの、内容をすぐに理解しきれない場合があり、後で戻って見直したりする場合もある。

しかし、山下清展で導入された専用のハンディタイプ音声ガイドは、こうした不便を解消し、混雑した展示室の中でも自分のペースで作品を鑑賞し、理解を深めることができる点が高く評価される。

すべての作品を順序よく鑑賞できなくても、音声ガイドにより作品の背景や見どころをしっかりと把握できたという声が多数寄せられている。

一方、つくる冒険のアールブリュット展では、スマートフォンを使って音声ガイドにアクセスする方式が導入されている。

一部の来館者に利用されていたものの、山下清展の専用端末のほうが使い勝手良かったという意見もあり、今後も、来館者の利便性を考えた音声ガイドの活用が期待される。

また、巡回展小松美羽展についても非常に楽しみにしている。

近代美術館で開催された歌川国芳展を鑑賞したが、動く浮世絵の映像展示

は興味深いものだった。小さなお子さんが非常に多く来場していることに驚いた。

映像自体は5分程度と短いものであったが、予算の制約はあるにせよ、こうした展示も、今後の巡回展の一つとして取り入れることができれば、幅広い層にアートに触れる機会を提供できると感じた。

さらに、チームラボの展覧会を鑑賞した経験からも、若い世代のアートの受け取り方や興味の持ち方が変化していることを実感している。

これまでの展示手法だけでなく、デジタル技術や映像などを取り入れることで、より多くの方々に楽しんでいただける展覧会づくりが可能になると考えるので、今後はこうした取組も取り入れていただきたいと思う。

最後に、音声ガイドは今後も継続して導入してほしい。

委員： 美術館の昨年度の事業内容と今年度の事業計画を拝見し、限られたスタッフ体制の中で、非常に多くの事業や展覧会を精力的に実施され、ギリギリの状況でありながらも、充実した活動を展開されていると感じる。

そのおかげで、私自身も日々楽しませていただいております、何よりも、函館という地域に住んでいることで、学生や子どもたちを身近に美術館へ連れていける環境があることはとても大切だと感じている。

北海道の大学生全員が等しく美術館に行けるわけではないが、こうした環境を今後も何とか維持していくことが重要だと思う。

また、実際に大学生と一緒に美術館を訪れると、「とても面白かった」と言われることが多く、学生の心にしっかりと響いていることを実感する。

美術に縁のなかった教員の中にも、「長年函館に住んでいながら初めて来てみたが、すごく良かった」という感想を持つ方が少なくない。

一方で、外部から見て「美術館に行ってみよう」と思う最初のきっかけとして、展覧会のタイトルの工夫がより効果的になるのではと感じている。

来館してみると内容は非常に現代的で面白いのに、タイトルに作家名だけが前面に出ると、名前を知っている人には響いても、知らない人にはなかなか響かないことがある。

例えば、サブタイトルを前面に出す、あるいはボランティアの方々とも相談して工夫するなど、タイトルの付け方に新しい視点を取り入れることで、現在取り組んでいる活動をより多くの人に広げていけるのではないかと思います。

委員： 美術館は、集客増に向けた取組やアンケートの実施など、さまざまな工夫を重ねながら取り組まれていると思う。

また、これまでの協議の場で出された意見についても、すぐに実現できるものと時間を要するものがあるが、その中で可能なものから着実に実行しており、非常に工夫しながら前向きに取り組まれていると思う。

運営の方針や方向性についても非常に良いと感じており、根気強く継続して取り組んでいただくことで、さらに集客の拡大につながっていくものと期

待している。

委員： 集客というのは非常に難しい課題だと思う。資金を投入すれば、人気の高い作家を招くことが可能かもしれないが、現実的には容易なことではないと思う。

その点で、今年度の小松美羽展は巡回展として開催されており、単独開催に比べて複数の美術館と連携することで、費用面の圧縮にもつながるものと考えている。

今後、この展覧会がどのように展開していくのか、次年度に向けた特別展の可能性を探るうえでも重要な取組になるのではないかと。

また、今年度は札幌芸術の森美術館での開催との違いや比較も視野に入れながら検討していくことで、より一層の成果につながると感じた。

委員： 先日、山下清展を鑑賞した際に、展示室出口に設置しているアンケートについて、紙だけでなく電子でも受け付けていることを知り、驚いた。美術館には友人と一緒に来館することが多いが、中にはアンケートの存在を知らなかったという人もおり、もう少し工夫すれば回答が増えるのではないかと感じた。

例えば、招待ハガキにホームページ等のQRコードが掲載されているが、そのような形で入館時に小さな紙に印刷したものを、チケットと一緒に渡すなどの方法をとれば、より多くの来館者にアンケートの存在を周知できるのではないかと。

また、美術館では映画会や学芸員による解説など魅力的なイベントが開催されているが、多くは週末に集中している。

週末は都合がつかず参加できない方もいるため、平日の開催機会があると、参加できる人の幅が広がると思う。

人数は限られるかもしれないが、平日に参加を希望する人も一定数いると思うので、ぜひご検討いただければと思う。

事務局： 検討のうえ、善処してまいりたい。

委員： 可能かどうかは別として、ジャストアイデアとして3点ほど提案させていただく。

まず、39年前に美術館が開館した当時、私は函館市内の高校に通う高校生で、美術館の前の通りが整備され、とても美しく雰囲気のある道になったことを誇りに思ったことを今も覚えていてる。

全国で講演活動をする際にも「函館で一番好きな場所は」と聞かれる際には「美術館前の通り」と申し上げている。

高校生の頃は、美術館に入りたくてもきっかけや勇気がなく、足を踏み入れられなかった経験があり、今の高校生も同じ気持ちかもしれません。

そこで、イラストや絵を描くことに興味のある高校生を対象に、高校生アートコンテストのような企画を実施し、函館出身のアーティスト（例えば TERU さん）や、地域ゆかりの著名人に審査員として関わっていただくことで、将来の作家を応援しながら美術館をより身近に感じてもらえるのではないかと考えている。

二つ目に、函館は国際的観光都市でもあり、インバウンドを含め多くの観光客が訪れている。ホテルのロビーなどで美術館のチラシやポスター、クーポンを配布したり、旅行者が「函館旅行の一環で美術館に立ち寄った」と SNS に投稿できる仕組みを整えることで、市民や観光客の双方に美術館の魅力を広められるのではないかと考えている。

最後に、ミュージアムカレンダーについてだが、自宅に飾れるカレンダーがあれば欲しいと感じたし、権利関係もあると思うが、スマートフォンやパソコン用に毎月更新の壁紙カレンダーを SNS など配布するのも良いのではないかと考えた。

美しいビジュアルに加え、休館日や展示情報を入れれば、身近に美術館を感じてもらえる工夫につながるのではと思った。

委員： 昨年・今年と「はこだてカルチャーナイト」で夜間開館を行い、大変活気があったと先ほど伺った。人員体制など運営面での課題があると思うが、近年では、夏季の金曜日か土曜日のみ夜間開館を実施している例も見られる。

例えば、五稜郭タワーの閉館後に美術館を訪れることができれば、新たな集客の可能性にもつながるのではないかと考えている。

そのような夜間開館について、今後計画や検討の余地があるのか伺いたい。

事務局： 開館・閉館時間は道立館で統一されており、就労規則やスタッフ体制の整備といった点からも、夜間開館を実施するには難しさもある。ただし、本日このような意見をいただいたことも来館者からの要望なども見極めながら、本庁に対して開館時間延長の提案を行うことも検討していきたいと考えている。

実際に「はこだてカルチャーナイト」は良い事例となっており、今後も集客状況や来館者の声を踏まえながら、可能な取組について検討してまいります。